
アフィニア日誌

皇 圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフィニア日誌

【Nコード】

N3648Z

【作者名】

皇 圭介

【あらすじ】

あこがれの先輩に3度目の告白にしてOKをもらえたその日、彼は異世界に召喚されてしまう。「我々を救ってください」と詰め寄る黒ローブたち。

え、なにこれ。俺ってば勇者？ そんなことより元の世界に戻して。「先輩との仲はこれからなんだよおおおお！」 帰る当ての無い彼(?)の日常が始まる。

00話 「暗転」

学校帰り、一人土手を歩く。

その日は記念日になった。

夏休み前のその日、俺の顔はだらしなく笑み崩れていたと思う。

「
」

なにしろ1年間近く好意を抱き続けていた部活の先輩に、告白してやっとOKをもらったからだ。

ライバル
恋敵は多く、その戦いは長く苦しいものだった。

告白は3回。

一度目は「あなたのこと知らないから」

自分の事を知ってもらおうよう努力した。

2度目は「頼りない弟みたいにおもってるから」

頼りがいのある男になるよう、勉強も部活もがんばった。ついでに弁当で餌付けもした。

そして3度目「君には負けたよ。こんな気持ちにさせられるとは思わなかった」

「
ふふふふふふ」

いや、気持ち悪いとかいわないで。だってしかたないじゃない！
幸せなんだもの！

今なら夕日に向かってだって走れる。

そう、どこまでだって！

先輩とのこれからの夏休みを想い。

ウエディングベルの鐘の音を聞き。

子供は何人がいいかなあと完全に頭が湧いたところで。

目の前が真っ暗になった。

(え、え、え、何！？)

グラリと倒れる感覚。

顔面で感じた痛みとひんやりとした地面の感触が、その時感じた
最後だった。

「……成功か？」

「……おそらく成功だろう」

まわりで聞こえる声。少なくとも一人二人ではない複数人の気配。

ぼんやりする頭を一生懸命働かせる。

(病院かな・・・?)

随分硬いベッドのようだが、そこに仰向けに寝かされている。力を込めてみるが、腕どころか指すら動かせない。

(俺、いったいどうなって・・・?)

まったく自分の自由にならない体と格闘すること数分、なんとかまぶたを開ける事に成功する。

だが、そこにあったのは病院の白い天井ではなかった。

(え・・・なにこれ)

見えるのは岩肌。薄ぼんやりと照らされた岩肌が視界いっぱい広がる。

(洞窟・・・?)

まったくわけがわからない。

何故、自分がここにいいのか。

なんでこんな所に寝かされているのか。

(夢・・・?)

とにかく、情報がほしいとばかりに唯一自由になる目あたりを窺う。

うわ、なんかいいいる。

寝かされた自分を囲うように、黒っぽいローブを着た人がいつぱい。

うわ、目が合っちゃたよ。

「おお・・・、お目覚めになられた・・・！」

騒がしくなる周り。

何がなんだかわからない。この状況で体一つ動かせないなんて怖すぎる。

(夢、夢、夢、これは悪い夢)

まぶたを閉じれば夢が覚めて、先輩とのハッピーライフが始まるのだ。

現実逃避ぎみの俺。

だがそんな事など関係なしに状況は進む。

「お目覚めの気分はいかがですか？エメランデイス様」

黒ローブたちの集団を割るように、濃い化粧の女が現れる。

30代前半といったところだろうか。

いや、それよりも・・・。

(エメランデイスって誰・・・！)

俺？俺が呼ばれてるの？何故何どうして？

「目覚めたばかりで混乱されるのも無理はありません」

「ですが、我々の話をどうか聞いていただきたいのです」

混乱する俺のことなどほったらかしてどんどん話を続ける女。
わけがわからないなりに理解した事は、

今、彼ら（黒ローブたちね）は悪逆非道な者たちによって滅ぼされそうになっている事。

起死回生として、太古の禁呪を使い俺をこの世界に呼び出した事。

「どうか、我々を救ってください」

待つて、待つて、待つて。

これってもしかして。

小説とかでありふれたアレ？

魔王で勇者なファンタジーもの？

もしかして魔王とか倒さないと、もとの世界に戻れない？

ってか、ここ異世界？異世界なの！？

日本でないの？地球でないの？

先輩との甘々な恋愛生活が！！！！

(いいいいー やああー！！！！)

声が出ないので心で絶叫。

やっとのことで告白OKもらって、その日の内に異世界召喚だなんて。

天国と地獄だなんて。

(ひどすぎる！！！！)

だが、状況はこれで終わりではなかった。

気絶しなかったのを褒めてもらいたいくらいだ。
今まで16年生きてきて、これほどの恐怖を味わったのは初めてだ。

「ム……!どうやら怯えさせてしまったようだな」

騎士風の男はそう言って剣をどこかにやると、にっこり笑ってきた。

正直に言つと怖かった。

何か、無理して笑い顔を作っている感じが。

「まったく、こんな年端もいかぬ娘を生贄にしようなどと」

娘?生贄?

何いつてんの???????

騎士に抱き上げられた俺に見えたもの。それは、俺の体だった。

自由に動かないその体は……ちっちゃな女の子のものだった。

01話 「記憶喪失」

「本当に間に合ってよかった」

騎士はそういつて俺を抱きしめる。

男に抱きしめられる趣味などないが、体が動かないのだから仕方がない。

というか、鎧についた返り血とか付くからやめて。

血が、血が、血が！

(・・・)

いや、現実逃避はもうやめるべきだろう。

現実を見つめなければ前には進めない。

だとしても、だ。

(なんで女の子になってんの!!??)

体が動かせないから見える範囲で確認するかぎり、4、5歳ぐらい。
い。

幼稚園レベルの少女だ。

ストレートの長く青っぱい髪も見える。

勇者で魔王がファンタジーのはずなのに。

少女に生贄ってなに。

もういやだ。先輩の所に返して!!

「隊長」

若い騎士がやって来た。

「どうした」

「制圧はほぼ完了しました。ですが、われわれの把握していない隠し通路があったようで」

「逃がしたか」

「4、5人ほどです」

話しこむ騎士たち。

というか、こいつ隊長だったのか。

「首謀者は逃がしましたが、コイツは回収できました」

若い騎士は手の中にある本を振ってみせる。

黒い立派な装丁の分厚い本で、とつても高そう。

「邪神召喚の書か」

「ええ。なんとか使われるのは阻止できましたね」

「まったく邪教徒どもは度し難い。それで、この娘の両親は」
「残念ながら」

え、ちょっと待って。

この娘が生贄で。

ここに俺がいるってことは・・・俺が邪神？

いやいやいや。俺はただの高校生ですから！善良な一市民ですか
ら！！！

何かの間違いですから！！！！

「まったくこんな物があるから、いらぬ騒ぎが起る」

「ええまあ」

「燃やせ」

「いやでも魔術師ギルドに確認を取ってからでないか」

「かまわぬ燃やせ」

待って、もしかしてそれって大事な物じゃないの？

主に、俺があつちの世界に帰るために！！

「わかりましたよ」

若い騎士はため息一つついた。

近くにあつた篝火の中に投げ込まれる真っ黒な本。

パチパチと音をたてて燃え尽きていく。

(あああああああああ……)

俺の意識はそこで途切れた。

(ここどこだよ)

次に目覚めた時に見えたものは、天蓋つきベッドだった。
わずかにだが、首を動かすことができた。

(おお・・・、少しだけだが体が動く)

あとは指先ぐらいか。しかしなんだ、このベッドは。やわらかすぎて体が沈みこみそう。でも柔らかいのに適度な芯がマットに入っているようだ。

ただ高価たかそうだなー、という感想しかでてこない。庶民です。

(夢じゃなかったか)

どうしたらいいのか。

そもそも、もとの世界に帰れるのか。

でも俺、今、女の子なんだけど。帰っても女の子？

というより元の俺の体、今どうなってんの？

何もかもわからない。
情報、情報がほしい。

せめて体だけでも動いてくれたら・・・！

(先輩、待っててください・・・)

もう一度、周りを見渡そうとしたとき、その音は聞こえた。

コン、コンと2回。

(ノック?)

「失礼するわね」

視界の片隅に映っていた扉が開き、20代後半と思わしき女性が入ってくる。

髪は薄いブラウン。全体的にほっそりしていて、何が楽しいのかその顔には笑顔が浮かべられている。

彼女はニコニコしながらベッドに近づいてきて・・・俺の視線とぶつかった。

「起きたのね。体は大丈夫？」

それに答えようとして、俺は気づいた。まだ、声がでないことに。

「あ・・・、あ・・・」

彼女はにっこり笑うと「いいのよ」と言った。

「まだ無理をすることはないの。ゆっくり、ゆっくりとね」

頭をゆっくりと撫でられて、眠気が襲ってくる。

どうやら体はまだ睡眠を欲しているらしい。

その手に安心を覚え、俺は再び意識を手放した。

・・・結局、言葉を話せるようになったのは2日後だった。

この2日間、世話になりながら聞いたところによると、この女性の名は『クリシュティナ・オクスタン』といい、この屋敷の奥方らしい。

そして、この屋敷の主人は救出隊の騎士の一人だそうだ。

(たぶん、あの人だろうな)

一人の騎士の顔が浮かぶ。

血まみれの姿しか見ていないせいか、このいつも笑顔の女性の旦那さんというのが、こうなんというかイメージが湧かない。

しかしながらこのクリシュティナさんは非常に面倒見がいい。この屋敷にはメイド(そうメイドだ)も何人かいるようなのだが、俺の世話は必ず彼女がしてくれる。

早くに母親を無くした俺にとってみれば非常にくすぐったかった。

「喉は乾いてない？お水飲む？」

「退屈じゃない？絵本でも読んであげる」

「こんな服はどうかしら。やっぱり女の子なんだから、かわいい服を着たほうがいいと思うの」

構いすぎな程だ。

その様子から思うことがあったが、あえて指摘はしなかった。

その日の夕方、その男が帰ってきた。

「いくつか報告と質問がある」

まだベッドから移動できない為、それは俺の寝ているところで行われた。

例の騎士（やっぱり予想通り隊長だった）とクリシュティナさんと俺。3人だけだ。

旦那さんの名は『ベルフェ・オクスタン』というそうだ。

「まずは君の両親のことだが」

母親は亡くなりましたが、父親は元気ですよー、と思っただが理解した。

この体の、この女の子の両親。

「残念だが、二人ともお亡くなりになられた」

あの黒口・ブどもめ。怒りが湧く。

「その時の事、何か覚えているかね」

知らないし、答えられるわけがない。どうすればいいんだ。

とりあえず、首を横に振る。

「……確かにショックな事だからな。覚えていなくても仕方がない」

とりあえず誤魔化せたか……？

「では質問を変えよう。どこの国から来たのかわかるかね？」

何？地元民じゃないの？国って、この国の名前すら知らないよ！
また首を横に振る。

「ご両親共々、旅の途中で巻き込まれたようだな。運のない事だ」

「あなた、その言い方は・・・」

「ム・・・。すまない悪かった」

こちらは小娘なのにきちんと頭を下げ謝ってくる。
好感度アップだ。

「一時的に記憶を失っているのかもしれない。確かにこの年齢の子
供にはショックが大き過ぎる」

「・・・」

「では、せめて名前ぐらいは覚えてないか？」

「あ・・・の・・・」

名前って、本名言うわけにもいかないし。
もう首を横に振っとけ。

「そうか・・・。だが、名前さえわからんとなるとどうするべきか・
・・・」

いやほんと、どうしたらいいんでしょうね・・・。

「だったらあなた」

クリシュティナさんはポンと手を打ち合わせる。

「記憶、そう記憶が戻るまで家であずかったらいかがでしょう」

さも今思いついたように言う。

でも俺にはなんとなく、そう言い出すんではないかと思っていた。

「いやしかし。・・・だが・・・」

「ね、お願いあなた」

「・・・」

「ね、お願いあなた」

ベルフェさんはこちらに向くと、言いくそうに訊ねてくる。

「あ・・・と。名前がないと不便だな。まあとにかく、君の方はどうだろう、記憶が戻るまでもいいから、この家で暮らさないか」

「あの・・・、えっと・・・」

どうするべきか。もとの世界に帰る事は決定でも、とりあえずの寝床はほしい。

帰り方を探すにしても拠点は必要だ。

「・・・ご迷惑でなければ・・・」

がばっ、という効果音が出そうなぐらいの勢いで抱きついてくるクリシュティナさん。

「だったら、ね、ね」

「どうした」

「とりあえずでもなんでも名前は必要だと思っの」

「それはそうだが」

「わたしが付けてもいい？」

ベルフェさんは重いため息をつくとき、こちらをちらりと窺う。

俺もコクリと軽く頷く。

「いいだろう」

「とっつってもいい名前があるの」

それはね。

「アフィニア。アフィニア・オクスタンというの。素敵でしょう」

02話 「家族」

この家にお世話になるにあたって、ひとつ注意しなければならぬ事がある。

それは俺が、俺であることを気づかせてはいけないという事だ。

なぜならば、彼らは儀式が失敗したと思っている。

よく聞いてみれば、やはりあの黒ローブどもは邪神を信仰する狂信者たちで、邪神を召喚することによってこの国を、延いては世界を破滅させようとしていたという。

呼び出されるはずだった邪神の名は『終末の破壊神エメランディス』。

世界の終わりに現れ、太陽を飲み込み、月を飲み込み、最後に大地を飲み込むのだとか。

どれだけかい口だよ、とあきれるが神話に文句をいっても仕方がない。

どちらにしても俺は破壊神ではない。

親戚にそんなおかしい人はいなかったし、地面とか食べる人もいなかったはずだ。

とにかく自分は破壊神とかではない。

では何か。

おそらく・・・、単なる想像に過ぎないが、あの黒ローブたちの儀式自体は成功していたのではないだろうか。

そして最後の最後に、まちがい電話をかけてしまったのではないか。

破壊神さんの自宅ではなく、この俺に。

そして俺はこの世界に呼ばれてしまった。
魂だけで。

この体の持ち主の魂は、あまり考えたくはないが、俺がこの体に入った衝撃で弾き飛ばすか押しつぶすかしたのだろう。別に俺のせいではないはずだが・・・罪悪感を感じる。

とにかく、もし俺が俺であることがばれてしまったら命は無いだろつ。

事情を話した所で、納得などしてもらえそうにない。
だいたい何と言えればいいのだ。

「破壊神ではありませんが、別の世界の善良な一市民です。間違いで呼ばれた^{百曉}だけで、ちっとも邪悪ではないですよー」

とでも言えればいいのか？
自分で言つてて無理だとわかる。

なので俺は、無害な一少女を装う。
背中がむずがゆくなるが、こればかりは仕方ないだろう。

「クリシュティナさん、おはようございます」

「おはよう。昨日は良く眠れた？」

「はい、ありがとうございます。おかげ様でぐっすり眠れました」

まだベッドから立ち上がれない俺に、甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

「いいのよいいのよ、気にしないで。アフィニアちゃんはしばらく

この家で暮らすのだし遠慮なんかしちや駄目でしょ？」

「いえ……でも……」

「うん、まだ遠慮があるわね。あの……ね、お母さんって呼んでみない？クリシユティナさんって呼び方、なんとなーく余所余所しいでしょ？」

いや、余所余所しいもなにも他人だと思つ。

「いくら覚えてないといつてもご両親が亡くなられたばかりだし、不謹慎だと思つけれど」

でも出来れば呼んで欲しいな。

言葉には出さないが、何か圧力を感じる。

「お……お……お……お……お……お……」

小さいころに母親を亡くした身としては、母親経験値が不足ぎみなのだ。

レベルが高すぎる。

「おか……、おか……か、母^{かあ}さま」

何が違つのかはわからないが、この言い方なら俺の中の羞恥ゲージの上昇が低い。

『お母さん』は無理だ。

「んー、それでいいと思つ」

OKが出た。

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

「……」

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

今、二回言ったよね。

なんとというか、……か、母さまは押しが強い。

いつもニコニコして争い事とか避けて通りそうなのに。

騎士の嫁ってというのは、押しが強くなければなれないものなのだろうか。

それとも、なったから押しが強くなったのか。

卵が先か、にわとりが先か。

「……と、父さま」

はい、よくできました。

柔らかい手で頭をなでなで。

なんとという幸せ空間……！駄目だ、抵抗しないと。

（俺には、元の世界に帰って先輩とイチヤイチャするという野望が……！）

帰るために情報を集めるどころか、まだ満足に体も動かせないのですが。

（今はとにかく、動けるようになるのが先決か）

「まさか、こんなにかかるとは」

その後、結局時間をかけて押し切られてしまい、正式な養女になっ
てしまった。

幼女の養女だ。

ごめん。物を投げないで。

彼女を……。クリシュティナさんを、母^{かあ}さまと呼んでから1年
自由に動けるようになるにはそれだけかかってしまった。

(もう先輩、俺の事なんて忘れてるだろうな)

告白OKした日に相手が失踪だなんて、どう思われているだろう
か。

いや、わずか、本当にわずかの可能性だが、元の世界とこちらの
世界では時間の流れが違うという可能性がある。希望を捨ててはい
けない。

それが例え、ほんの小さな可能性であろうとも。

まあいい。

しかし、ここまで回復に時間がかかるとは予想外だった。
病気とか、体力がないという話ではない。

医者の説明によると、体内の魔力が色々ぐちゃぐちゃになってい
たそうだ

魔力・・・魔法。

ファイアーボールとかメテオストライクとかもあるんだろうか。
火球 隕石召喚

あんなのもあるのか。
あるんだろうな。魔力があるんだから。
話が逸れた。

とにかくそのせいで、体の意思伝達システムが麻痺していたらしい。
その上あまりにも複雑になっていたため、自然治癒しかないといわれたのだ。

これはあれか。
俺の魂のせいか。

何しろ、自分は破壊神なんぞではないとわかっているものの、少なくとも間違われるぐらいの存在。
10分の1、いや100分の1だとしても、この娘の体にとっては途轍もない負担だったのだろう。
だから、本来の魂を弾き飛ばした上、こんな体になってしまったのだろう。

あくまで予想だが。

動けないのならば、と言う事で、母^{かあ}さまや父^{とっ}さまに色々教わることにした。

知っておいて損はないだろう。

俺には目的があるのだし。

ベッドの上で寝たきりでもやれる事はあるはずだ。

たとえばこの国。

国の名は『ジンバル王国』。

海に面した、それなりに大きな国という事だ。

国境を接する国は3つ。

テューレ、アリス、ノアの3国。

ここ10年ほどは戦争も無い。

平和な事だ。

平和万歳。

話が逸れるが。

ここ一年、ベッドに寝たきりで分からなかったのだが。

こちらの世界にはお湯につかる、という習慣は無いらしい。

普通は水風呂のようだ。

たしかに、お湯を沸かすというのは大変かもしれない。

気候的にこの世界は総じて暖かいらしく、水でも問題ないという事だ。

元の世界ではシャワーが中心だった俺でも、入れないとなるとお湯を張った湯船がほしくなる。

これはなんとかしないといけない。

寝たきりの間はどうしていたかって？

母さまに、水に浸した布で拭いてもらっていたさ。

羞恥プレイだが、動けないので抵抗はあきらめた。

家族のスキンシップだ。

トイレ？聞いてくれるな。

そういえば学ぶなかで知ったのだが。

なんとエルフヤドワーフといった種族もいるらしい。

俺が勝手に言ってるだけで、エルフヤドワーフといった名前ではないが。

耳長族とか、小人族とか言っらしい。

魔獣とか魔法生物とかいるらしいし、ファンタジーだ。

さあ行こう、夢と魔法と冒険の世界へ。

もう来てるけどね。

ただ、俺にかなりの魔力がある事を知った母さまが、魔術の訓練をしてくれることになった。

その方が治りが早いらしい。

今使えるのは初級も初級、明かりの呪文だ。

はじめて成功したときには感動したね。

魔法だよ、魔法。

母さまによると、俺は筋がとってもいいそうさ。

なんでも話によると、母さまは魔術の研究施設に勤めていたらしい。

実践よりは研究メインで、大魔術士とかではないそうだが。

そこで警備主任の騎士だった父さまと知り合ったとか。

のろけられた。

まあでも、その話を聞く内に予想が当たっていた事が判明した。

やはり、父さまと母さまには子供がいらないらしい。

それも、生まれてから亡くなったのではなくて、もとからいのないのだ。

どちらかだろつとは思っていたのだが。

するとこのアフィニアという名前は、いつか子供が出来たときのためにずっと温めていた物なのだろうか。・・・母さまに秘密を持っているのはとても心苦しいが、打ち明けられるたぐいの物ではない。

元の世界に帰るのは決定事項だが、はたして俺はこの新しい両親と笑って別れられるのだろうか。

「母^{かあ}さま、今日は新しい呪文を教えてくださいなのですが」

「明^{ライト}かりはもう完璧だし、そうね、加速^{クイック}なんかはどうかしら？」

「どんな呪文なのですか？」

「対象は自分だけだし、短時間だけど1・2倍のスピードで動けるようになるのよ。腕とか」

「それはすごいです」

その時にならないと分からない事だし。

・・・考える必要は無いかもしれない。

今は、まだ。

03話 「初めてのお出かけ」

「父^{とう}さま母^{かあ}さま。準備は出来ましたか」

一年以上ベッドに寝たきりの生活だったのだ。

このお出かけを多少楽しみに思っても仕方が無いだろう。

いや、すごく楽しみだ。

先ほどの問いかけを10数回してしまうほどには。

そういえば、こちらの一年は元の世界より短い。

なんと360日なのだ。

誤差の範囲だろうとは思うが、やはり別の世界なのだと実感。

「・・・待たせたな」

「お待ちどおさま。そうしていると、やはりあなたも年相応ね」

年相応・・・！

今なにかヒビが入った気がした。

主に俺のプライドとか、とか。

「あなたは妙に大人びた所があるから。そういう所が見れて、わたしはうれしいわ」

誕生日などわかるはずもなかったので、母^{かあ}さまを母^{かあ}さまと呼んだあの日を誕生日とした。

年齢は5歳。

本当の所はわからないが、そう決まったのだ。

そして先日誕生日で6歳となった。

屋敷をあげてのパーティーで、身分の上下も気にしないお祭り騒ぎだった。

日頃見かけるメイドさん（そうメイドだ）や御者さん、父さまの部下の人とか。

ずっと前に見た、あの若い騎士さんもいた。どうやら、まだ下っ端のようだ。

まだ出世してなかったんだね。

ただ、この身分をあまり気にしないのがこの家だけなのか、世間一般かどうかはわからない。

要検証、である。

準備が出来たのならば、と馬車にて出発する。

目的は王都である。

そうはいつでも長旅にはならない。

朝に出発すれば、馬車でゆっくりいつでも昼前には着くのだ。

だが、俺の興奮が冷めることは無い。

話には聞いていても実物を見るのは初めてなのだ。

異世界の町並み！

人とは異なる亜人種たち！

まだ見ぬ食材！（これは微妙に違うか）

そんな俺を母さまも父さまも微笑みながら見ている。ちよっと幼かったかもしれない。

いや、年齢的にはいいのか。

6歳といえは小学校一年ぐらいだしな。

王都に着くまでまだ距離はあったが、馬車の窓から異世界の風景を堪能した。

「そこは人種の坩堝るつぽでした」

数時間の馬車の旅も終わり。

待ちに待った王都だったが、やはり凄かった。

確かに人の多さという意味では現代日本のほうが上だろう。

だが、なんとというか混沌さがこちらは勝っているように思う。

整理されてないからこそその活気とでも言おうか。

(すげえ、エルフだ)

皮鎧に身を包み、数人の仲間と談笑する姿はもろにゲームの世界だ。

たぶんあれが母かあさまに聞いた、冒険者なんだろう。

キラキラした目で見てみると、こちらに気づいたのか手を振ってきた。

こちらも手を振り返す。

おうおう、何ガンつけてんだこらあ

というのはなかったか。

6歳の女の子相手に凄む奴はさすがにいないか。

あまり、キョロキョロし過ぎて迷子にでもなったら恥ずかしい。

ここは親孝行のためにも手を繋ぐべきであろう。

ベルフェ父さま。そのお顔は少々、だらしないですよ？

その日、俺達親子は目一杯楽しんだように思う。

母さまには洋服屋を何件も連れ回された。

自分のは選ばずに全部俺のだったのだが。

「ふふ、アフィニアはなんでも似合うわね。選ぴがいがあるわ」

まさか、着せ替え人形の気分をリアルで味わうハメになるとは。

母さまの楽しそうな顔を見てると、嫌とも言い出せない。

体が女になっただけでは買物物は楽しめないらしい。

初めて食べる果物の味に驚き。

他国の民芸品を手に取り。

大道芸人たちのパフォーマンズを楽しみ。

大通りを人ごみの中、家族の会話を楽しんで。

そしてそれは起こったのだった。

それは衝撃。

横合いから突然飛び出してきた人影に体当たりされ、俺はゴロゴロと転がった。

当然ぶつかってきた方も俺に巻き込まれてだ。

少しぶつけて頭が痛いし、手や足に多少の擦り傷はできたかもしれないが。

とりあえずは無事だった。

そこで怒りが湧いてくる。

こんな人が一杯いるところで、走る速度ではなかった。

思わず素で文句を言おうとして固まった。

(ダークエルフ・・・！)

いや、エルフなんて名前ではなかったか。

確か耳長族。

するとこれは黒耳長族とでもいうのか。

でもそれだと耳だけ黒そうだ。

どうでもいい。

もうダークエルフでいいや。

そのダークエルフは銀髪に褐色の肌の・・・。

自分と同じぐらいの少女だった。

「えと、大丈夫？」

少し頭でも打ったのか、どうやら意識が朦朧としているようだ。

しかし、周りの人も冷たい。

あきらかに見ているのに無視している。

こちらの世界にも他人に対する無関心とかあるのか。

しかし、と思う。

随分薄汚れた格好の子供だ。

親はどこにいるのだろう。

「ほら、立てる？」

手を差し伸べる俺。

「……」

脅えた表情の、その少女の視線を目で追って。

ヒゲづらの汚らしい男とご対面することになった。

「いいか、小娘」

「……」

「このガキの首輪が見えないのか？他人の奴隷に手を出したら何さ
ねても文句はいえねえぜ」

首輪？首輪ってなんだ？

母^{かあ}さまは奴隷なんて……。

「この世界に奴隷制度なんてあったの？」

「アフィニア、こっちに来なさい」

父さまの声。そっちを見ると青ざめた母さまの姿もある。

こちらにこようとしているのを、父さまが押しとどめている。

「おおっと、貴族の嬢ちゃんでしたか」

父さま母さまを見ると途端に卑屈になる男。

「家の奴隷が迷惑をおかけしまして」

「・・・」

「ほら、おまえも謝るんだ」

無理やり少女を這い蹲らせると、頭に足をのせ踏みにじる。

そして、ところかまわず蹴りはじめる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

頭が真っ白になった。

その時、自分がなにを考えたのか後になっても分からない。

ただ、とっさにダークエルフの少女に覆いかぶさっていた。

そして感じる脇腹への強い痛み。

鍛えてもおらず、一年間もベッドの上で暮らしていた俺には庇う事さえ出来なかったようだ。

先程のように・・・今度は一人で転がっていく。

聞こえる母さまの悲鳴。

「アフィニア、アフィニア・・・大丈夫!？」

「ちっ」男の舌打ち。

「貴族さん、今のはオレが悪いわけじゃねえぜ？」

「わかっている」

「じゃあ。オレはこれで」

少女を連れて行くこととする男。

「・・・ま」待ってと言おうとした俺の声に被るように、父さまの
声が聞こえた。

「待て」

「貴族さんといえども、規則には従ってもらわねえと。奴隷をどう
しようと、持ち主の勝手、それが法さあ」

「それもわかっている」

「文句は聞かねえぜ。規則を守らせるのがあんたらの仕事だ」
「いくらだ」

父さま・・・!

「金貨6枚、いや諸経費あわせて7枚になるなあ」

父さまを値踏みする男。

あきらかにこちらの足元をみている。

「いいだろう。持っていけ」

父さまの手から金貨を受け取る男。

「へへへ……、毎度ありー」

下卑た表情を浮かべて去っていく男。

結局、自分は何も出来ないまま終わってしまった。
何がしたかったのかもわからないまま。

場を収めたのは、父さまと金貨の力だった。

帰りは行きより人数が増えた。
でも空気はとっても悪かった。

ダークエルフの少女も脅えていたが。
まあ無理も無い。

母さまの機嫌がとっても悪かったのだ。

年甲斐もなく、ほっぺを膨らませているのはどうかと思うが、今回は悪いのは自分の方だから仕方ないだろう。やった事の善し悪しはともかく、心配かけたという一点において全面的にこちらの敗訴

が決定してしまう。

「母さま、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる。

そして必殺の上目づかい+涙目。

これは滅多に使われない、ゲージを2つも使う超必殺技だ。
ゲージの名前は羞恥ゲージだ。

だが……。

クツ、これに耐えるというのか。

いつのまに抵抗値レジストが上がったのだ。

だがほっぺがピクピクしている所を見ると、もう少して壁は突破
できると見た！

「もういいだろう。そのぐらいにしておいてやれ」

父さまとうさまのフォロー。

「おまえもちゃんと反省したな？」

「うん。もう無茶な事はしない」

「アフィニアもこう言っている。許してやれ」

「もう。わかりました。でももうこんな心配させないで」

母さまかあがにつこり笑ってくれた。

やっぱりこの笑顔だよなー、と思いつつ眺める。

あれ？俺、いつのまにかマザコンになってないか？

思い当たる事はたくさんあるが、今は女の子だからいいよねと納得する。

でも。これからやるつもりしている事を言ったら怒られるんだろっ
な。

たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648z/>

アフィニア日誌

2011年12月16日01時45分発行